植草学園大学研究紀要　第７巻　５～13頁（2015）

B. Edu. Health Sci. UG Univ.　vol. 7, 5-13, 2015

総　説

小学校音楽科の鑑賞教育における課題

― 鑑賞指導法への提言（１）―

川端眞由美[1]　植草学園大学発達教育学部
柴辻　純子[2]　植草学園大学発達教育学部　非常勤講師

平成20年の学習指導要領の改訂，及び全国規模の小学校音楽科の学力調査の実施以降，音楽科の鑑賞教育における言語活動に関する研究報告が目立っている。文部科学省の提案に，音楽科の鑑賞教育に関して小学校教育現場が混乱している様子が理解できる。

鑑賞分野は音楽科の授業内容の中でも，教師が深く綿密な予習を行ったかどうかが問われ易い部分である。単に作品の楽曲構造や演奏形態のみならず，時代様式，作曲様式，演奏習慣，音楽史，文化史，美術史，哲学，文学等の背景が複雑に絡み合う領域である。そのためにも，ある程度の上記の知識を身につけた上で指導をしないと，児童との対話型音楽鑑賞教育に対して的確に対応することができない。その意味で，鑑賞指導は取り分け音楽学に直結した要素を含んでいることから，音楽学を専門とする立場での音楽鑑賞教育に対する提言を行うものである。

キーワード：小学校音楽科，鑑賞教育，言語活動の充実，音楽学

１．はじめに

平成20年の学習指導要領の改訂に際して，小学校音楽科の改訂ポイントの中に，言語力の育成・活用の重視が掲げられ，鑑賞において言葉で表す活動が追加された。指導要領改訂と同じ年の20年12月から翌21年２月にかけて全国規模の小学校音楽科の学力調査が42年ぶりに実施された。文部科学省はこの調査結果とそれに伴う指導上の改善等をとりまとめた報告書を作成している。新学習指導要領と音楽科の学力調査実施以降，鑑賞教育における言語活動に関する研究報告が多く見られるようになった。文部科学省の新しい提案に，音楽科指導法に関して小学校教育現場の苦労の様子が研究報告等から見て取れる（文献参照）。

実は，鑑賞の分野は音楽科の授業内容の中でも，教員が一番下調べを密にかつ詳細に行わなければならない部分である。例えば，男性ソプラノの声を聴いて，児童が「天使のような」と表現した時，教員が「適切な表現が理解できないために比喩的になってしまった」と思ってしまったらどうであろうか。これは教員側に大きな手落ちがあることになってしまう。何故なら，音楽史も時代背景も文化史も理解していないために，素晴らしく的確な表現をした児童の発言を台無しにしてしまった例だからである。教員は本を読みよく勉強をしておかないと，大きな誤りを犯し，自らの勉強不足のために児童を傷つけてしまう結果となる。このように鑑賞の分野は，単に作品の楽曲構造や演奏形態のみならず，時代様式，作曲様式，演奏習慣，音楽史，文化史，美術史，哲学，文学等の背景が複雑に絡み合う領域である。そのためには，ある程度の上記の知識を身につけた上で指導をしないと，児童が表現した言語に対して的確に対応できなくなってしまう。その意味で

［１］　著者連絡先：川端眞由美
［２］　柴辻　純子

鑑賞指導は取り分け音楽学に直結した要素を含んでいることから，本論は音楽学を専門とする立場として，音楽鑑賞教育に対する提言を行うことを主旨とした論考である。

２．小学校音楽科の現状

音楽鑑賞領域の各学年の内容に，感じ取ったことを言葉で表すなどの活動を位置づけ，楽曲や演奏の楽しさに気がついたり，楽曲の特徴や演奏のよさに気がついたり理解したりする能力を高めることが重要であることが示されている。しかし，小学校の現場で音楽科を指導する多くの教員は，鑑賞教育の中で音楽を言葉で伝えることの難しさを第一に挙げている。そもそも，小学校音楽科の授業時間は現在平均１週間あたり1.5時間である。この時間内で各学年の指導内容を生徒に理解させるのは容易ではない。音楽の指導内容は多岐に渡るため，音楽が得意ではない教員にとっては受け売り的な授業になってしまう場合もあろう。また現場の教員の不満として，読譜の勉強をしても一週間後の音楽の時間には殆どの生徒は忘れてしまうため，前回と同様の授業の繰り返しとなり，先へ進めない。従って，５年生になっても楽譜を読めない子どもがクラスの半分以上いるとのことである。こうした音楽科に関する課題や悩みを全国の小学校の教師が抱えている事がHP上のアンケート調査から理解できる（文献参照)。特に鑑賞の授業の運営方法及び評価方法に悩みと疑問の声が大きい。そこで，小学校の音楽科の授業に際して，児童を指導する立場にある教員がどのような点に問題を抱えているかを把握し，その指導法の問題点を洗い出し，より良い方向性を導き出し，何らかの助言や解決策を探るきっかけとなる事を願い，本学近隣の小学校でのアンケート調査を実施した。

３．小学校音楽科の鑑賞授業の現状

3.1　アンケートにみる鑑賞授業の現状

小学校学習指導要領に各学年の目標が明示されているが，鑑賞においては６学年共通で，「様々な音楽に親しむようにし，基礎的な鑑賞の能力を育て，音楽を味わって聴くようにする。」（第２章第６節音楽）とある[1)]。この目標に対して小学校ではどのような指導が行われているか，平成26年７月に千葉市内の４校の音楽専科ではない小学校教員を対象に，鑑賞分野の授業に関するアンケート調査を実施した。対象は，低・中学年を受け持つ20代～ 50代の教員で，男女比４：６，37名から回答を得た。今年度，音楽の授業を受け持たない教員，音楽の授業を受け持った経験のない若手教員も含まれるが，前者には昨年度の授業について記入をお願いし，後者には回答可能な設問のみ記入いただいた。今回のアンケートは，授業の現状を把握するために，主に以下の４点について，①鑑賞前の指導方法，②鑑賞中の児童の反応，③鑑賞後の指導内容，④鑑賞授業における指導上の問題点，および自由記述も含めての調査を行った。

鑑賞授業は，年間の総授業数に対して10 ～ 15％の時間を割り当てている。①鑑賞前の指導方法は，教員が「教科書をもとに教材となる楽曲の説明を行い」（60％），児童は「教員作成もしくは市販のワークシートに記入」（32％）しながら楽曲への理解を深める。さらに「児童による発表」（20％）や「鑑賞曲とはいえ教材曲を歌ったり，動作化する」など，児童が能動的に関わる指導方法も採り入れられていた。また教師が説明する前に「まず音楽を聴く」ことで，子どもの想像力を引き出そうと試みる例もあり，楽曲を理解するための工夫がみられた。

授業ではCD等の音源を用いて音楽を鑑賞するが，②鑑賞中の児童の反応は，「音楽に合わせて体を動かす」（70％），「声を出して口ずさむ」（56％）あるいは音楽に合わせて机を叩くなど，座席で静かに聴くだけでなく，身体全体で音楽を感じ取る様子がうかがえた。音楽を聴くことによって「表情が生き生きする」（48％）といった変化や「この曲知っている」と自発的に声をあげる児童がいる一方で，反応のない「無関心」（８％）な児童もいるようだ。

③鑑賞後の指導は，「教員作成のワークシートに記入」（45％）や「自由に感想を書く」（37％）といった記述作業とともに，「意見を出し合い話し合う」（45％）といった児童の発言から音楽の特徴を導き，表現していく活動が行われている。「子どもの表現をふくらませる」，「子どもが感じたことを大

切にする」,「自分の思ったことを素直に表現する」など，子どもの気持ちに寄り添った指導を多くの教員が心がけていた。また「感想を絵画や別の手段で表現する」（27％）など，他の教科との関連を意識した指導も採り入れられ，特に低学年で音楽を絵画と言葉の両方で表現する指導が行われていた。

④鑑賞授業における問題点として，多くの教員が「音楽を言葉で伝えることの難しさ」（60％）を挙げた。特に低学年において,「思うことはあって言葉で表現できない児童に対しての支援の方法がわからない」といった内容の記述も多かった。また「児童の集中力」（27％）や「授業時間の確保」（13％）など，鑑賞分野だけに留まらない問題についても指摘された。

3.２　鑑賞授業における問題点

今回のアンケートを通じて，鑑賞授業における教師と児童のおおよその様子がうかがえた。そのなかで問題点として挙げられるのが,「音楽を言葉で伝えることの難しさ」である。すなわち，鑑賞前に教師が楽曲を形づくる要素の関わり合いや音楽的特徴を聴き取るためにどのような言葉で説明するのか，それらを感じ取るために児童にどのような言葉で問いかけをするか，そして鑑賞後に児童の発言に対して否定的な言葉がけをせず，容認しながら聴き取り，感じ取ったことを表現できるように導くかという，指導上の難しさである。これは，音楽から聴き取り，感じ取ったことをただ直感的に言葉で表現することではない。「いかに」,「どのように」といった理由を音楽のなかから見つけなければならない。そのために教師は，教材となる楽曲に関してより深く理解していくことが必要となる。それが児童の言葉を広く受けとめ，学習指導要領の目標である「基礎的な鑑賞の能力を高める」ことにつながるであろう。

また，今回の学習指導要領の改訂で「言語活動の充実」が明記された[2)]。今回のアンケート調査からもわかるとおり，楽曲から聴き取り，感じ取ったことを言葉で表わし，児童が話し合いのなかで他者の考え方や感じ方に気づいていく「言語活動」と結びつけた授業を行っている事例が多くみられた。こうした授業展開は，他教科でも同様の取り組みがあるため，教員はあまり不安を感じていない。それにもかかわらず，多くの教員が難しさを指摘したのは，その活動の評価についてである。すなわち，歌唱や器楽と比較して評価の観点が立て難く，児童が書いた文章から鑑賞の能力をどのように評価するかという点である。文章力は，鑑賞能力と等しいわけではなく，特に低学年は，子どもの思いの表われをどのように評価するか難しい。聴き取り，感じ取ったことを表わすために身体表現や絵画表現等と結びつける活動が行われるが，それによって評価がより難しくなると言えよう。言語活動と評価の問題については，鑑賞教育における言語活動が緒に就いたばかりで，経過を観察する必要がある。これについては，今後の他の研究調査および報告を検討しながら稿を改めて論じたい。

４．小学校音楽科における鑑賞に関する学力調査について

4.１　学力調査について

文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センターは,「特定の課題に関する調査――小学校音楽・中学校音楽――」を全国の小学校・中学校の協力の下に平成20年度に実施した。これは音楽についての学力調査で，全国規模の音楽科の学力調査は，小学校では42年ぶり，中学校では初めての実施であり，実技調査としては初めての実施であった。内容は，基礎的・基本的な知識，感じ取って工夫する力，音楽表現の技能，鑑賞する力の実現状況を把握する事。リズムづくり（小学校）や歌唱（中学校）などの実技調査の実施である。調査方法としては，ビデオやコンピュータを用いた映像や音声を伴う出題を工夫し，児童生徒が興味を持って取り組めるように配慮されている。調査対象学年は小学校では第６学年，調査実施日は平成20年12月３日から平成21年２月27日，調査実施学校数及び児童生徒数は全国の国公私立学校から無作為抽出，小学校は約110校，約3,000人であった。

この調査は，今後の教育課程や学校における指導の改善に役立てる事が目的であるため，先ずこの調査結果及び報告書に基づいて，鑑賞に関する問題点を探ってみる。

4.2　鑑賞に関する学力調査問題　問題１

鑑賞に関する問題は２問あり，問題１は「音楽を形づくっている要素と曲想に関する問題」である。以下「特定の課題に関する調査」(2011文部科学省)の調査ⅡＢ（鑑賞）からの引用である。

イベール作曲の『パレード』という曲をききます。この曲はＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄの四つの部分からできています。映像を見ながら（１）から（４）の問題に答えてください。

設問（１）曲想を醸し出しているリズムの変化を選択する。

いちろうさんは『パレード』の音楽のＡの部分とＢの部分をきいて，「遠くから足音がきこえてきたと思ったら，動物たちがにぎやかに行進してきたみたいだ」と感じました。

いちろうさんがこのように感じた理由としてもっともふさわしいと思うものを選んで，その番号を書いてください。

Ａの部分とＢの部分の音楽を一回ききます。

１．ＡもＢも，同じリズムの伴奏だから
２．Ｂは，Ａよりゆったりしたリズムの伴奏だから
３．Ｂは，Ａより軽快なリズムの伴奏だから

設問（１）の正答は３.で，約86％の児童が正解であった。

設問（２）曲想を醸し出している楽器の音色，強弱，速度のそれぞれの変化の記述の適否を選択する。

みゆきさんは『パレード』の音楽のＢの部分とＣの部分をきいて，「広場に行列が入ってきたと思ったら，目の前ではなやかな演技が始まったみたいだ」と感じました。

下の①から③について，みゆきさんがこのように感じた理由としてふさわしいものには○を，そうでないものには×を書いてください。

Ｂの部分とＣの部分を一回ききます。

①　Ｃから金管楽器と打楽器が加わるから
②　ＣはＢに比べて，強くなるから
③　ＣはＢに比べて，速くなるから

設問（２）の正答は①○，②○，③×で，全問正解は約60％であるが，個々の問題の正解率は70％以上であり，②は91％であった。

設問（３）特定の旋律が楽曲の各部に表れているか否かを選択する。

今から流れる旋律をよくきいてください。この旋律は，この曲の中で楽器をかえながら何度かでてきます。

Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄのそれぞれの部分について，この旋律があらわれるものには○を，そうでないものには×を書いてください。

音楽は全体を通して一回ききます。

正答はＡ○，Ｂ○，Ｃ×，Ｄ○である。全問正解が61％であるが，個々の正解率は76％以上であった。

設問（４）楽曲の強弱の変化によって，はなやかな行列や行進のどのような様子が表されているかを記述する。

この曲の紹介文をかずやさんが書きました。(　　)に入るもっともふさわしい文を考えて，紹介文を完成させてください。音楽は全体を通して一回ききます。

〔紹介文：この『パレード』は，イベールというフランスの作曲家がつくった曲です。Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄの四つの部分からできています。ぼくが，この曲をきいて一番おもしろかったのは，強弱の変化です。この強弱の変化によって，はなやかな行列や行進が（　　）様子をあらわしていると感じました。〕

設問（４）の解答例として以下の文が示されている（広場に入ってきて，演技をどうどうとひろうした後，また広場をでて遠ざかっていくような)。

設問（４）の正答は，楽曲の強弱の変化をとらえ，曲想を記述しているもので，正答・准正答を合わせて約21％であった。最多の35％は，「曲想を記述しているが，楽曲のどの部分かが特定できず，楽曲の強弱の変化によって生み出されるとは言えないもの」であった。

上記の問題１の４つの設問に関して，筆者の見解を示す。設問（１）と（２）は鑑賞曲として音楽を

聴いていなくても設問上の文章から読み取れるものであり正答の可能性がある。設問（３）はある旋律が曲中で楽器を変えながら何度も現れるとまで記載され，説明をしてから回答を求めている。音楽鑑賞としての根本的な点，児童がどんな感動を得たのか，それはどのようなもので，どうしてそのように感じたのであろうかを自らが自らの体験に基づいて表現することであり，感じることまで前もって設定してある点に疑問を感じた。設問（４）は，設問（２）の文中に「広場に行列が入ってきたと思ったら，目の前ではなやかな演技が始まったみたいだ」と記載されていることを引用して，最後は弱くなることが想像できるので，「……広場から出て遠ざかる」とでもすれば，音楽を聴かずとも文章が作れてしまうのではなかろうか。

4.３　鑑賞に関する学力調査問題　問題２

問題２は「楽曲の構成と曲想に関する問題」である。以下は「特定の課程に関する調査」（2011文部科学省）の調査ⅡＢ（鑑賞）からの引用である。

ア，イ，ウの音楽をきいてみましょう。どのような感じの音楽なのか忘れないように，特徴についてメモをとりましょう。音楽はそれぞれ二回ききます。

設問（１）要素（強弱）の特徴を記述する。

イの音楽からウの音楽へうつるとき，どのように音の大きさが変わりましたか。その変化を書いてください。イとウの音楽を一回ききます。

設問（１）に関しては83％の児童が強弱の変化をとらえた記述をしていて，正答あるいは準正答であった。

設問（２）要素の特徴の記述の適否を選択する。

次の①と②の中で，ウの音楽の特徴についてあらわしているものは○を，そうでないものには×を書いてください。

ウの音楽を一回ききます。

①打楽器の音が重なりあっている

②四拍子でできている

正答は①○，②×で，正解率は91％であった。

設問（３）作品全体の流れについて，音楽を特徴付けている要素の変化を表す語句を用いて，想像したことや感じ取ったことを記述する。

ア→イ→ウ→ア→イの作品全体の流れについて，特徴とその特徴から想像したことや感じ取ったことを，下の言葉の中から一つ以上使って書いてください。［メモ］に書いたことを参考にしてください。音楽は一回ききます。

音色の変化　　リズムの変化

音の高さの変化　　音の長さの変化

設問（３）の解答例は以下である。「初めは水の中にいるような不思議な世界に入り込む感じだったけど，とつぜん大きな音色の変化をし，はげしく暴れるようで怖く感じた。でもそのあとすぐに静かになり，やはり不思議な気持ちになった」。

設問（３）の正答として，楽曲全体の構成またはその一部について，要素の変化を表す語句を用いて，想像したことや感じ取ったことを記述しているものが，56％あった。

問題２に関する筆者の見解として，問題１同様に作品を聞いていなくても，設問に書かれている文面をよく読むことにより，正解が導き出せてしまう。鑑賞教育とは，音楽を聴く事から始まり，それが児童・生徒にどのように伝わったかが大切な部分ではなかろうか。従って，児童が表す言葉がどのように稚拙であろうとも，まず自分の言葉で語らせ，そこから次の段階へと導く表現を示すような指導が必要と思われる。そうでなければ，「楽曲の特徴や演奏のよさに気が付いたり理解したりする能力を高めること」には繋がらない。

５．鑑賞授業の問題点

本論冒頭で挙げた事例を検証してみよう。男性ソプラノ歌手の演奏に対して，児童が「天使のような」と表現した事に対して，教員が「適切な表現ができない」とみなしてしまった問題である。男性ソプラノ歌手が職業として堂々と表舞台に登場するのは16世紀初めである。ローマ教皇庁のシスティーナ礼拝堂の聖歌隊の職がその最高の地位であった。かれらは６，７歳で教皇庁の音楽教育機関である

ジューリア礼拝堂聖歌隊で，音楽やその他の学問に関する過酷な特訓を毎日受け，聖歌隊員として成長していく。この幼子は，天使にされた男児と称された。何故なら，教会で聖歌隊員として神に捧げる音楽を演奏するからである。この件に関する情報は，現在膨大な量の書籍から得ることができる。さらに，余りに有名な実話として映画化された男性ソプラノ歌手も実在した。簡単に調べられ，一般の人々にも良く知れ渡った事柄である。従って，「天使のような」という表現がいかに適切かつ百点満点の表現であるかが理解できよう。鑑賞授業の際の何れかの時点で，教師がもし児童に音楽史上の史実について多少説明する機会を持つと，興味を持って真剣に鑑賞するきっかけとなろう。音楽史上の汚点とも奇跡とも呼べる最も興味深い史実だからである。

さて，鑑賞教育とは本来どのようなもので，児童・生徒に何をもたらすものであろうか。鑑賞授業の一環として，ある小学校の児童がコンサートホールで生のオーケストラの演奏会を体験した後に，アナウンサーの質問に次のように答える場面が教育テレビで放映されたことがある。「音楽の授業で《家路》を鑑賞したことがある。いつも学校が終わる時に流れていた音楽であったから，その時は退屈していた。でも今日はドボルザークの交響曲を聴いている途中で，この《家路》が流れてきた時には驚いた。全曲の中のあの場所になぜ置かれていたのかが伝わってきて，曲が理解できたような嬉しい気分になり，感動した」。ここから理解できることは，この児童が音楽科の鑑賞の授業の時には，《家路》とは単独の楽曲であると理解してしまったのかもしれない。しかし偶然か否か，作品全曲を聞く機会を持ち，この交響曲全体の中での《家路》の置かれた位置の重要性に気づき，《家路》のみならず，作品全体に興味と愛着を持つことができたと思われる。これは，「音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てる」という音楽科の目標に示されていることが，理想的な形で反映された事例であろう。同じ児童は次のように話を結んでいる。「長い曲だと飽きてしまうことはある。でもだからと言って，一部分だけを聴けばいいとは思わない。この曲の中には，《家路》以外の部分にも素敵な箇所が沢山あった。作品全体が聴けて本当によかった」。音楽鑑賞教育の理想がまさにここにあると言えよう。それでは教室での鑑賞授業はどのように運営していったらよいのであろうか。その指導に向けた提言を次に示す。

６．鑑賞授業の指導に向けた提言（１）

小学校学習指導要領（以下の表記は指導要領に従う）には，音楽科の内容の「Ｂ鑑賞」の指導項目として「ア　楽曲を全体にわたり感じ取ること，イ　楽曲の構造を理解して聴くこと，ウ　楽曲の特徴や演奏のよさを理解すること」，今回の改訂で新しく設けられた表現および鑑賞の２領域の［共通事項］として「ア　音楽をかたち作っている要素を聴き取ることその働きを感じ取ること」を指導すると記されている[3)]。５．では《家路》の鑑賞の例を挙げたが，有名な旋律や楽曲の一部を聴くのではなく，楽曲全体を聴いて構造や特徴を聴き取らせる指導が明記された。音楽は，全体をただ漠然と聴いても何かを感じ取ることはできない。楽曲を理解し，音楽を深く味わうためには，音楽を聴く観点を示すことが必要となるだろう。それは，強弱や音量の変化等，比較的容易に確認できる特徴だけでなく，作曲家や楽曲が書かれた時代背景等，音楽史や歴史からの視点も必要である。また文学や絵画等，他の分野から想像力を広げる視点も有効であろう。演奏から感じ取った気分や雰囲気を形容詞で表現するだけでなく，楽曲分析的な視点から音楽的な効果に着目させるのもひとつの方法だと思われる。

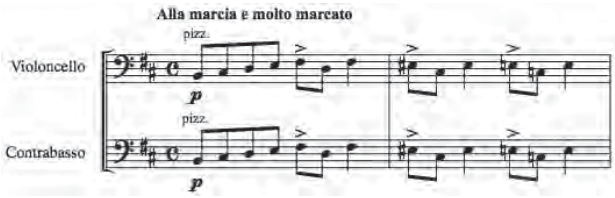
音楽を聴く観点は，楽曲によってそれぞれ異なる。上記の視点を踏まえた上で，本学の学生が現場で授業を受け持つ可能性のある小学４年生用の教科書『小学生の音楽４』（教育芸術社）からグリーグ作曲の「山の魔王の宮殿にて」を教材に指導法の具体例を示してみたい。

19世紀後半のノルウェーのエドワルド・グリーグ（1843 ～ 1907）は，美しい旋律と色彩豊かな和声で広く親しまれている作曲家である。なかでも劇作家ヘンリク・イプセン（1828 ～ 1906）の戯曲『ペール・ギュント』のために書かれた音楽は，彼の代表作のひとつに数えられる。劇音楽《ペール・ギュント》op.23（1874 ～ 1875年作曲）は，物語の情景を描写的に表現している音楽も含まれ，子どもでも想

像力を働かせやすい。「山の魔王の宮殿にて」は，後に管弦楽用の４曲から成る組曲が編まれた際に，《ペール・ギュント第１組曲》op.46（1888年）の終曲に収められた。今日では劇音楽として演奏される機会は少ないが，組曲は演奏会でもしばしば取り上げられる。同上の教科書には《ペール・ギュント》から「朝の気分」（第１組曲第１番）も採用され，児童にとって継続的に学習してきた作曲家と作品である。

学習指導要領の［共通事項］の内容に，「ア　音楽を形づくっている要素のうち次の（ア）及び（イ）を聴き取り，それらの働きが生み出すよさや面白さ，美しさを感じ取ること。」が示され，中学年では，（ア）の「音楽を特徴づけている要素」は，「低学年で示したものに加え，音の重なり，音階や調」，（イ）の「音楽の仕組み」は，「低学年で示したものに加え，変化」と明記されている[4)]。

この楽曲は，アクセントで強調された短調の旋律主題の反復で作られ，弦楽器と管楽器が次々と重なり合い，変化する［譜例１］。音楽を特徴づける要素（音色，リズム，速度，旋律，強弱，拍の流れやフレーズ，変化）が明確で，聴き取りやすく，暗く不気味な曲想を感じ取ることは容易だ。



［譜例１］冒頭２小節

しかしこの音楽がどのようにして生まれたのか，児童に適切な言葉かけをするためにも，教師にはさらに踏み込んだ理解が必要となろう。まずは，楽譜から得られる情報である。楽譜冒頭に速度標語「Alla marcia e molt marcato（行進曲風に，１音１音を非常にはっきりと）」とあり，この曲の速度と拍の流れは，行進曲に由来するものである。低弦楽器（チェロとコントラバス）が弱音のピッチカート奏法で主題が提示されるが，低音楽器の組み合わせと指で弦をはじく奏法がぞくぞくする音色を生み出している。この４小節の旋律主題は，続いてファゴットが受け持つ。同じ旋律を楽器が演奏することでの音色の変化や，他の木管楽器（４年生でその響きを学ぶフルートやクラリネット）との違いに耳を傾けることも，音楽を聴く観点になるだろう。

第26小節から高音楽器が旋律主題を受け持つが，これまで主題を弾いていた楽器は行進曲のリズムを示す伴奏となる。その変化や，旋律と伴奏のような楽曲内での楽器の役割関係にも着目したい。第50小節から全楽器が登場して音量と速度を上げるが，その音色と音量の変化や，第74小節で休符がはさまれることで緊張感が高まるが，これは，休符と直後の多くの楽器が積み重なり作られる厚い響きの和音との交替が生み出すものである。そしてこれらの曲想の変化に注意しながら，音楽が向かっていく方向を意識すると全体の大きな流れを把握することができ，楽曲全体を理解することができるだろう。

ここまで音楽を聴く観点を，楽譜から見つけ出してきたが，楽曲が作られた時代背景や劇の内容について知ることも音楽の理解の助けとなる。この曲は，山の魔王の宮殿で老トロルが歌い，若いトロルが踊る場面を描いた音楽で，トロルは，北欧に伝わる，姿かたちが一定しない妖怪の一種である。トロルは，幼児教育の現場で取り上げられる機会の多い，ノルウェー民話を題材にした絵本『三びきのやぎのがらがらどん』に登場するので，この名前を聞いたことがある児童も少なくないだろう。子どもたちの経験の積み重ねとなる話題の提供は，想像力を高めるとともに，音楽を味わって聴く観点のひとつになる。また，短調のこの楽曲の曲想を言葉で表現する際，「怖い」「暗い」「不思議な」「不気味な」といった形容詞を用いることが想定されるが，それに加えて，音楽と物語それぞれから何色を想像するか，物語に由来する「黒色」「青色」「緑色」等とともに，「金色」のような楽器の音色から発想する色にも目を向けると，さらに広がりがみられるだろう。

以上のように，音楽をより深く理解するために，音楽を聴く観点を具体的に示した。しかしこれは，４．で述べた鑑賞に関する学力調査のように決められた回答に導くためのものではなく，児童が楽しく興味をもって，さらなる展開に向けて進める授業作りへの提言である。そのため教師は，これまで以上

に教材研究を深め，豊富な語彙で言葉をかけていくことが不可欠となるが，鑑賞教育に重きを置くことで，歌唱や器楽の活動の能力を高めることにもつながるのではないかと考えている。

7．謝辞

本研究のためのアンケート調査を引き受けてくださった，千葉市内の小学校の校長先生はじめ，音楽専科の先生，その他の先生方に厚くお礼を申し上げます。

8．文献

1）Celletti, Rodolfo. 1983. Storia del belcanto. Fiesole: Discanto（Contrappunti, 15）［川端眞由美.『ベルカント唱法――技法と発展の歴史』東京：シンフォニア］1998
2）川端眞由美「ジョヴァンニ・アンドレーア・ボンテンピに関する一考察――ドイツで初演されたイタリア・オペラ《パリデ》への道」海老澤敏先生古希記念論文集編集委員会編『モーツァルティアーナ――海老澤敏先生古希記念論文集』所収：259-267　東京：東京書籍　2001
3）文部科学省『小学校学習指導要領解説　音楽編』東京：東洋館出版社　2008
4）文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター『特定の課題に関する調査―小学校音楽・中学校音楽―』 2011
5）『小学校の音楽４』東京：教育芸術社　2011
6）『小学校の音楽４　教師用指導書研究編』小原光一編著　東京：教育芸術社　2011
7）橘田美喜恵「音楽科における言語活動の充実をめざした学習指導の研究―聴き取る力や感じ取る力を育てる小学校鑑賞領域の授業づくりを通して―」平成20年度山梨県総合教育センター　2008
8）小暮潔「小学校音楽科の鑑賞領域における音楽のよさを感じ取り味わって聴く児童の育成―３段階の学習活動に交流の活動を取り入れて―」群馬教育センター　2011
9）倉田斉「思考力，判断力，表現力を高めるための小学校音楽科授業の工夫・改善―言語活動による〔共通事項〕の指導を通して―」熊本県教育センター　2008

9．註

1）文部科学省『小学校学習指導要領解説　音楽編』平成20年８月（2008），p.88
2）同上，p.4
3）同上，pp.13-14
4）同上，pp.17-18

植草学園大学研究紀要　　第７巻　５～13頁（2015）

B. Edu. Health Sci. UG Univ.　vol. 7, 5-13, 2015

Review

Problems in the Teaching of Appreciation in the Elementary School Music Department "Proposal（1）toward the method of teaching music appreciation"

Mayumi KAWABATA[1]　Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University
Junko SHIBATSUJI[2]　Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

After the implementation of The Revision of the Courses of Study for Elementary and Secondary Schools of 2008 and the nation-wide scholastic ability survey on elementary school music departments, a study about the language activities in the teaching of music appreciation in the music department stands out. Regarding the proposal by the Ministry of Education,Culture,Sports Science and Technology, there is a state of confusion in elementary schools about the teaching of music appreciation in the music department.

The field of appreciation is the part where it is easy to question whether the necessary elaborate lesson preparation has been carried out. Not only music structure and the performance form of work, but also background information such as epochal style, composition style, performance practice, music history, cultural history, art history, philosophy, and literature are domains which are connected with each other in a complex manner. Therefore, without having acquired the knowledge mentioned above teachers cannot instruct children about the precise words that they need for expressing themselves. We make it a principle to offer our ideas for the teaching of music appreciation in this sense because the instruction of appreciation is connected directly with musicology.

Keywords: elementary school music department, music appreciation education, enhancement of language activities, musicology

---

[1]　Mayumi KAWABATA
[2]　Junko SHIBATSUJI